

## 巻頭言 「苦しい思い」

宇野 元

ヘルマン・ヘッセ。淡い水色の背景に、白く、Hermann Hesse の文字が配置された、美しい文庫本の装丁と一緒に思い出されます。ノミで彫られたような彼の風貌にも魅かれます。愛をこめて、わが友、と呼びたい人です。

ヘッセは叙情性に富んだ青春小説によって世に出ましたが、第一次世界大戦ののち、人間の内面の深刻な分裂を描いた作品を発表しています。そのなかのひとつ『荒野の狼』（1927年）は、ハリー・ハラーという中年の放浪者を主人公とするものですが、イニシャルが H. H. であり、その頃、自らも危機を体験していたヘッセ自身の自画像と言ってよいでしょう。ハリーは、自分のなかに、いわば何人もの自分がいることに気づき、相反する願いがぶつかり合う悩みを体験します。

こんなエピソードが語られます。往来で、知人とぼったり会う。知人は彼を尊敬していて、ぜひうちに来てください、と夕食に招きます。彼も心が動いて訪問を約束します。ところがその晩、夫妻のもてなしにふさわしく応えられないちぐはぐさを感じます。食後、別の部屋に移っての語らいのとき、彼はわきにあった小さな絵を手にとって、批判的な言葉を口にしてしまいます。それは夫人がとくに大切にしているものでした。夫がそれを伝えると、さらに悪い言葉を吐き出すように述べ、幸いな時をぶちこわして出てゆきます。

喜んでしたわけではありません。ハリーは苦しい思いで街灯の下を走り回ります。よいことを願う自分がある。その一方で、それとひどく矛盾する自分がある。

私の主よ、私の願いはすべて御前にあり  
嘆きもあなたには隠されていません。(詩編 38:10)

自分の心を探れば、いろいろな願いがひしめいている。自分は何を本当に願っているのか？ 「私」は何者なのか？ 私たちの心のうちには、いろいろな願いとともに、深い嘆きが存在することに気づかされます。そのすべてが「あなたには隠されていません」と語られています。私たちは「私」の深淵をながめ、その複雑さ、その矛盾に悩みます。そんなとき、聖書は目をあげて「あなた」を仰ぎます。この「あなた」とは誰か？ 私たちと同じように、顔もち、言葉をもっておられます。その心に私たちの悩みを置いて、悩む「私」を担ってくださる方です。私の心を私自身よりもよく理解し、私を支えてくださる方です。「私の主よ」と呼ぶことのできる方です。